HTLV－Iの母子感染：29歳までの追跡調査

（分担研究：母子感染防止に関する研究）

植田浩司*，楠原浩一*，宮崎千明*，岡田賢司*
門屋　亮*，徳川　健*，福重淳一郎*

【要約】母親のHTLV-I抗体保有状況が判明しており18～24歳まで追跡されてきた1965年生まれの沖縄の子ども(現在は成人)84名を、さらに27～29歳まで追跡した。抗体陰性の母親の子ども77名は全て抗体陰性が持続しており、母親が抗体陽性で小児期に抗体陽性となっていた２名は抗体陽性が持続していた。母親が抗体陽性で小児期に抗体陰性であった５名の中で抗体陽転したものはなかった。この成績は、３歳までに成立したHTLV-Iの母子感染が20歳代後半まで動かないこと、ATL多発地域においても水平感染が容易にはおこらないことを示している。

【見出し語】HTLV-I，血清疫学，母子感染，追跡調査

【研究方法】

＜対象＞

私たちは、風疹ウイルスとHTLV-Iの母子感染の長期観察を目的として、1965年生まれの沖縄の子どもとその母親の追跡調査を行っている。これまで、311名の子どもを18歳まで[1]、168名の子どもを22-24歳まで[2]追跡した。今回、これらの子どものうち84名から27～29歳の時点で新たに血清を採取しHTLV-I抗体を測定した。採血者数は、27歳時が63名（男性32名、女性31名）、29歳時が41名（男性24名、女性17名）であった。うち20名（男性11名、女性９名）は、27歳、29歳とも採血を受けた。

＜方法＞

HTLV-I抗体は、ゼラチン粒子凝集法（セロディアHTLV-I）でスクリーニングを行い、MT-1細胞を用いた間接蛍光抗体法で確認を行った。

【結果】

子どもの母親のHTLV-I抗体保有状況は18歳までの追跡調査で判明しており、陽性７名、陰性77名であった。抗体陰性の母親の子ども77名は、いずれも抗体陰性が持続していた。抗体陽性の母親の子ども７名のHTLV-I抗体の推移を図に示した。小児期に抗体陽性となっていた２名は抗体陽性が持続していた。小児期に抗体陰性であったの子ども５名の中で抗体陽転したものはなかった。なお、このうち３名については24歳時に末梢血単核球の PCRを行っているが、HTLV-Iプロウイルス DNAは検出されていない[2]。

*九州大学小児科 (Dept. of Pediatrics, Kyushu University)

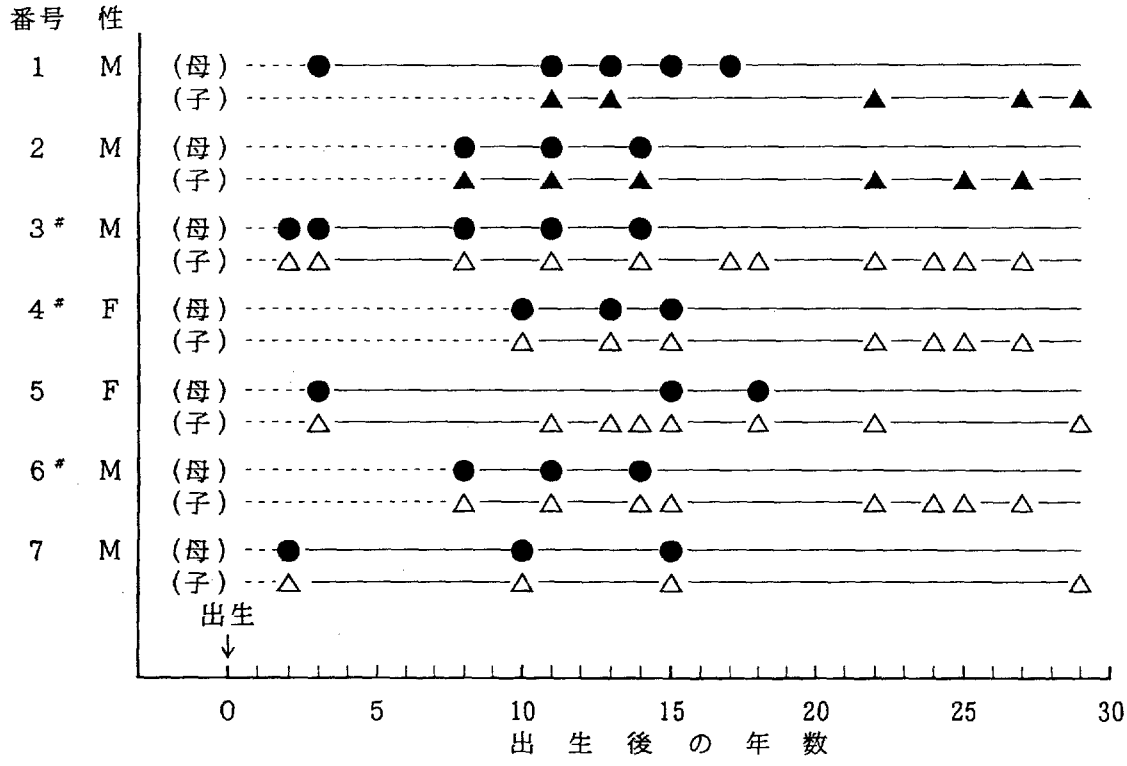

図 母親抗体陽性の子どものHTLV-I抗体の推移

●：母親の抗体陽性、▲：子どもの抗体陽性、△：子どもの抗体陰性、
-------：初回採血以前の期間、#：24歳時のPCRでprovirus DNA陰性

【考察】

私たちは、今回の調査の母集団となった沖縄の母子の追跡調査により、HTLV-Iの母子感染は3歳までに成立し、以後は成人後も含めて新たな抗体陽転がおこらないことを報告した[1)2)]。今回、追跡期間をさらに20歳代後半まで延長して検討したが、同様の結果が得られた。また、reproductive ageに入っているこの集団に新たな抗体陽転者がなかったことより、ATL多発地域においても性交による感染も含めて水平感染の頻度は低いと推測される。これらの成績は、「ある出生コホートのHTLV-I抗体陽性率は時間が経過してもほぼ一定である」こと示しており、私たちが横断的調査で得た結論[3)]が約30年間にわたる縦断的調査で確認されたことになる。

【文献】

1)Kusuhara K et al: Mother-to-child transmission of human T-cell leukemia virus type I (HTLV-I): a fifteen-year follow-up study in Okinawa, Japan: Int J Cancer,40,755,1987

2)Ueda K et al: Mother-to-child transmission of human T-lymphotropic virus type I (HTLV-I): an extended follow-up study on children between 18 and 22-24 years old in Okinawa, Japan: Int J Cancer,53,597,1993.

3)Ueda K et al: Cohort effect on HTLV-I seroprevalence in southern Japan: Lancet ,ii,979,1989

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

【要約】母親の HTLV-Ⅰ抗体保有状況が判明しており 18～24 歳まで追跡されてきた 1965 年生まれの沖縄の子ども(現在は成人)84 名を、さらに 27～29 歳まで追跡した。抗体陰性の母親の子ども 77 名は全て抗体陰性が持続しており、母親が抗体陽性で小児期に抗体陽性となっていた 2 名は抗体陽性が持続していた。母親が抗体陽性で小児期に抗体陰性であった 5 名の中で抗体陽転したものはなかった。この成績は、3 歳までに成立した HTLV-1 の母子感染が 20 歳代後半まで動かないこと、ATL 多発地域においても水平感染が容易にはおこらないことを示している。